ボリシェヴィキ権力と二一／二二年飢饉

梶川伸一

【要約】二一／二二年飢饉はロシア史上稀に見る大災害であったにもかかわらず、ロシア史学界でも三〇年代の飢饉研究に比べてその遅れは明白で、従来の研究史ではこの被害は過小評価されてきた。これは「唯一適正な」社会主義路線とされるネップの導入と時期が重なることと無関係ではない。未曾有の大飢饉でありながらも、農業の荒廃、飢饉の認定の遅れ、不充分な救援活動などの様々な中央権力による政策上の過誤が、元々は二〇年秋からはじまる大旱魃という自然災害による被害をいたずらに大きくした。本稿では、この飢饉は従来指摘されてきたヴォルガ流域地域を遙かに超えた規模であり、カニバリズムに至る惨状が通常の現象になるようなその実態、帝国主義列強への不信の下で外国援助機関が救援の中軸であったことを、ネップの実施過程との関わりの中で描くことを目的とする。

史林　九六巻一号　二〇一三年一月

はじめに

これまでソヴェト史学界で一九三二／三三年飢饉はスターリンによる強制的集団化との関連で広く考察されたのに比べ、二一／二二年飢饉はいくつかの地域研究を除きロシアでも日本でもその後れは明らかである。[1] 特にソ連時代は二一／二二年飢饉を過小評価する傾向が一般的で、飢饉を克服する中でネップが実施されたとする論調が一般的であった。[2] この事情を、現代のある研究者は、「ソヴェト国民の何世代かはこの飢饉について総じて何も伝えられなかったか、速やかに克服したという文脈だけでそれに言及する歴史教科書で教育された。大衆の意識に地域的にはヴォルガ流域地方だけを覆った

ネップ初期の些末なエピソードとして、わが国のもっとも悲劇的現象の一つのイメージが形成されるようになった」と指摘する。[3] 秘匿された理由として、一、レーニン時代の出来事であった、二、農民宥和政策を根幹とするネップの開始時に農民の悲劇は発生しない、三、飢饉救済の主力はアメリカ救済局（American Relief Administration：以下ＡＲＡ）を筆頭とする外国組織であったことなどを挙げることができよう。

賢明な読者ならお気づきのように、この大飢饉はいわゆるネップの導入期と重なっているが、これは偶然であろうか。ソ連時代に「二一年の新経済政策への移行はソ連邦における社会主義建設の将来の運命にとって決定的意義を持った。ネップへの転換は過渡期の状況下で唯一適正な路線を確定した」[4]との基本的ネップ評価が存在した限り、これらには共時性以外の因果関係はありえないが、はたしてそうだろうか。[5]

そもそもネップの基本的枠組みとなる現物税の導入とそれに伴う農産物余剰の自由取引の認可は、ボリシェヴィキによる一七年の十月政変後の慢性的飢餓対策として穀物播種面積の増加を奨励するため、二〇年末の第八回全ロシア・ソヴェト大会で策定された播種キャンペーンに起源を持つ。同大会で播種拡大の奨励策として勤勉な農民経営にプレミアとして優先的に工業製品を現物支給することが決定された。だが、二一年初頭からロシア全土で露呈した経済的崩壊現象により農民への工業製品の供給は不可能になり、二月八日のロシア共産党中央委員会政治局会議［以下、党とはロシア共産党を指す］でレーニンによって、現物税を導入し農民に余剰を自由に取引する権利を与える構想が、簡単な『予備的草稿』として案出された。すなわち、国家が農民に工業製品を直接供給するのではなく、農民自身に自由取引の容認という形で余剰と交換に工業製品を受け取る機会を与えるとの構想が生まれ、通説ではこれが現物税構想の嚆矢と解釈されている。現物税に関する三月一五日づけ第一〇回党大会決議でも、それを法令化した三月二一日づけ全ロシア・ソヴェト中央執行委員会政令でもこの構想が、現物税を完納した後で農民に残る農産物を自由に処分することを認める形で具体化され、これはできるだけ多く播種すれば、それだけ市場での交換財が増えるという意味で、播種キャンペーンへの刺戟となったはずで

ある。繰り返せば、これは播種キャンペーンの枠内での措置であった。だが、二月半ばにほとんどの地方で食糧割当徴発は停止され、より正確には食糧割当徴発から播種キャンペーンのための種子割当徴発への転換を余儀なくされ、食糧の調達手段を失った分だけ食糧事情は全土で急速に悪化し、食糧配給の遅延と停止は多くの都市で飢えた労働者による騒擾を頻発させ、工場は操業を停止し、政治的にも経済的にもきわめて危機的状況を出現させた。

通常ネップ体制の基盤を創出したとされる三月二八日づけ自由交換についての布告は、党大会決議でも政令でも規定されていた現物税の完納後でなく、割当徴発の終了後直ちに、すなわち即座に農産物の自由取引を認可し、担ぎ屋を合法化したのである。こうして、現物税構想が本来持っていた播種キャンペーンへの奨励としての意義は失われ、播種用穀物が市場に流れるおそれも顧みず、当時の危機的食糧事情を克服しようと食糧農産物を市場で獲得するための自由取引が急遽認可されたのであった。この背景にはロシア全土を襲った厳しい飢饉がある。こうして、播種キャンペーンの枠は外され、緊急避難的に飢餓対策が採られたのである。だがここで重要なことは、これは重大な方針転換であったにもかかわらず、最高決定機関である党中央委政治局会議でこの転換に関する議論は皆無であり、三月二八日づけ政治局会議でこの方針転換が決定されたのは確実であるが、議事録はこれについて何も語っていない。[6] このようにして、第一〇回党大会決議に基づき「唯一適正な路線」としてのネップが成立したとの神話が生まれた。

二一／二二年飢饉はある意味で、十月政変から続くボリシェヴィキ体制の負の遺産の集約であり、それに関する研究は自ずとレーニン体制への批判を伴うことになる。これがこの事実が長い間秘匿されていた最大の理由であると思われる。筆者はスターリン体制下での大飢饉との比較研究を意図していないが、発生のメカニズムは驚くほどに酷似している。[7] まさに「ロシア革命」を「飢餓の革命」の側面から再評価する必要があるだろう。

大戦による統制経済の一環としてロシア全土に配給券制が導入されたが、その配給量は低減し続けた。[8] 地域差はあるとしても、当時の労働者に平均二三五九カロリー、農民（サマラ県の例）には三七五〇カロリーが必要とされ、そのうち平

均して四三％を穀物から摂取するといわれるが、ロシアではそれは六五％に達し、穀物生産量はロシア民衆の食生活に直接反映された。[9] 黒パン一フント［一フントは四〇分の一プード、約四〇九・五グラム］から九三六、白パンから八九二カロリーを摂ることができた。[10] 一七年一一月に配給券による食糧基準が一日パン半フント、その他と定められ、この基準がすべて満たされるとして一日一九七〇カロリーが保証されたはずであるが、実際には一八年六月のペトログラード労働者が配給券で受け取ったのは七一四カロリーにすぎず、この数字は徐々に低減し、二〇年夏以後ほとんど至る所で飢餓配給さえも停止され、その極限状態が二一／二二年飢饉であった。住民一人当たりのカロリー摂取は二一年一一月にチェリャビンスク県で一二〇〇、サマラ県で一一〇〇カロリーに低下した。[11] 本稿ではネップへの転換の背後にあった、レーニン体制下での二一／二二年飢饉の規模、実態、救援策が検討される。

① 二一／二二年飢饉に関して、梶川伸一『幻想の革命：十月革命からネップへ』、京都大学学術出版会、二〇〇四年、鈴木健夫「ヴォルガ河に鳴り響く弔鐘」（奥田央編『二〇世紀ロシア農民史』、社会評論社、二〇〇六年、所収）など、三〇年代初頭の飢饉についてのロシアの研究では Кондрашин В. В. Голод 1932-1933: Трагедия Российской деревни. М., 2008、日本では奥田央が『ヴォルガの革命』（東京大学出版会、一九九六年）で飢饉の実態を圧倒的質感で描いている。

② См: Поляков Ю. А. 1921-й: Победа над голодом. М., 1975.

③ Жатва смерти: Голод в Черябинской губернии в 1921-1922 гг. Черябинск, 1994. С.3.

④ Генкина Э. Б. Государственная деятельность В. И. Ленина 1921-1923 гг. М., 1969. С.11.

⑤ その詳細は梶川伸一『幻想の革命』、第三章を参照。

⑥ Декреты Советской власти. Т.13. С.245-247, 283-285; Российский Государственный архив социально-политической истории. [以下 РГАСПИ] Ф.17, Оп.3, Д.141, Л.1. ここで示したネップ移行論はロシア農民史研究者エシコーフによって検証された（Есиков С. А. Российская деревня в годы нэпа: К вопросу об альтернативах сталинской коллективизации (по материалам Центрального Черноземья). М., 2010. С.23-36.）。

⑦ スターリン時代の飢饉研究の第一人者であるコンドラーシンの成果は、「ロシアとウクライナにおける一九三二－一九三三年飢饉（奥田央編、前掲書所収）、「一九三〇年代初めのソ連における飢饉発生のメカニズム」（野部公一・崔在東編『二〇世紀ロシアの農民世界』、日本経済評論社、二〇一二年、所収）を参照。

⑧ その詳細については、梶川伸一『飢餓の革命：ロシア十月革命と農民』、名古屋大学出版会、一九九七年参照。

⑨ Сборник статистических сведений по СССР：1918-1923. М., 1924. С.377-379; О голоде: Сборник статей. Вып.2. Харьков, 1922. С.7.

⑩ Большаков А. М. Деревня 1917-1927. М., 1927. С.450; О голоде. Вып.1. Харьков, 1922. С.17.

⑪ Изв. ВЦИК. 1917.3 нояб.; Декреты Советской власти о Петрограде. Л., 1986. С.171; Народное хозяйство России за 1921 г. Белгрид, 1922. С.11.

第一章　飢饉の規模

第一節　ロシア農業の慢性的飢饉

技術水準が低い共同体的農法が圧倒的で、農業生産性はアフリカ並みといわれたロシアで飢饉[①]は慢性的現象であった。一七年の主要穀物の総収穫は、戦前に比べ酷い水準ではなかった。秋蒔と春蒔併せて民衆の主食となるライ麦の総収穫は〇九～一三年平均一一億四一七〇万プード〔一プードは約一六・四キログラム〕に対し、一七年は九億五一八一万プード（戦前比八三・四％）、馬鈴薯を除く穀物総収穫は三八億プードで、この数字は戦前より一三・四％低い程度であったが、それは不断に低減した[②]。

確かに農業条件が不利なロシアは過去にも間歇的に飢饉に襲われた。二一年末の第九回全ロシア・ソヴェト大会でのカリーニンの報告によれば、「最大の飢饉が一八九一／九二年にあった。一八九八年に再び飢饉があり、次いで、一九〇八年と再度一一年にそれは繰り返された。わたしはこの二〇年間に四回の飢饉を数えた。これが住民に異常に大きな損害を出し何十の県を襲った四大飢饉である。［……］要するに、われわれがロシアの飢饉を検討するなら、ほぼ三年ごとに多少なりとも普通の、五年ごとに大きな飢饉に出会い、一〇年ごとにその破壊力で突出した飢饉が起こっている」という。これは年ごとの穀物収量の大きな変動を意味し、「一九〇一から〇七年間のロシア、フランス、イギリスの収穫を比較するなら、イギリスで収穫率は九四から一〇七％、フランスで九〇から一一〇％の変動であったが、ロシアでは三三から一七六％に乱高下した」とされる[③]。

統計資料によれば、ロシア共和国で馬鈴薯を除く穀物の二一年の総収穫は一〇億五五八九万二〇〇〇プードで、中央農業地帯を中心に大きな旱魃被害のあった前年の総収穫一三億一四〇八万九〇〇〇プードを大きく下回る未曾有の大凶作となった。[4] だが特徴的なことは、この縮小は穀物生産地方でより顕著であり、例えば、十月政変から常に中央権力による調達対象となり、そのためアントーノフ蜂起をはじめとする農民運動が吹き荒れたタムボフ県の総収穫は、〇六～一〇年の平均六〇七一万八九〇〇プードが、一七年に四三四五万六六三五、二〇年に一四九五万四一五九、二一年に一一七五万三四四一プードに、すなわち、二〇％以下に激減した。[5]

第二節　広汎な大飢饉の罹災地

これはその時までにロシアが遭遇した最大の飢饉であった。二一年で農村住民一人当たり純収穫が五プード以下［通常一人当たりの食糧に最低必要な穀物量は一八プード以上といわれている］になったのは一二県に及んだ（一九一一年の凶作年で六県、〇六年で五県、一八九一年で三県以下）。餓死者数は一八九一年の六〇〇万人に対し二一年に一八〇〇万人といわれている。[6] 最大の罹災地の一つ、サマラ県では平年の馬鈴薯を含む穀物総収穫七〇〇〇万プードに対し、二一年は六〇〇万プード以下しかなく、過去最悪といわれた一八九一年飢饉の半分の収量しかなかった。[7]

その被害についてサマラ県を中心にヴォルガ流域地方が当時から現在までも特に強調され、二一年の飢饉援助もこの地方に集中された。だが実際の罹災地は広汎に亘り、様々な理由で非ロシア人周辺地域が際だって大きな被害を受けた。ウファー県ベレベイ郡から二二年三月の地方機関紙は、「毎日飢饉は多くの犠牲者を出している。おもにタタール人が、彼らの怠惰や多少なりとも文明化された生活様式の経験がなく適応力がないため死滅しつつある」と報じた。[8] 二二年五月現在で、全住民に対する飢餓民の比率が九〇パーセント以上（括弧内は比率）の地域は、タタール共和国［首都はカザン］（九六）、サマラ県［ロシア人の比率は二六年で八〇％］（九五）、チュヴァシ州［カザン西方、同じく二〇％］（九二）、マリ州［その北

方、同じく四三・六％］（九〇）、カルムィク州［ヴォルガ河口右岸］（九〇）の地域であった。[9]

これら非ロシア民族地域の多くで救援活動は大幅に遅れたため、そこでの被害はいっそう深刻になった。二一年七月に農村住民の八〇％が飢え、樹皮などの代用食を食べ、浮腫が出はじめ、秋蒔きは三〇％しか発芽せず、「収穫への期待を失い、飢えた住民はライ麦を種子に保全する［ことなく］餓死へと自分の運命を委ねた」と、チュヴァシ州執行委議長は伝えた。[10] 八月一日づけでキルギス共和国執行委議長から、「穀物の不作と完全な凶作は共和国住民を窮地に陥れ、特にトゥルガイ、イルギズ、テミル、ヂャムベイト郡で住民はハタリス、クマネズミ、道端に倒れた動物の皮を食べている。多くの餓死のケースがある。飢饉のためにチフスやコレラの伝染病が広まっている。もっとも資力の乏しいキルギス住民がもっとも被害を受けている」と、中央からの緊急援助が要請された。[11]

もっぱら畜産に従事する三〇万余の人口を持つカルムィク州は一〇月に次のように訴えた。「革命の開始から現在に至るまで止むことのない匪賊運動にはじまり、カルムィク自治州がその舞台となった間断のない内戦の結果、豊かだった畜産の九〇％が崩壊した。ヴォルガ流域を襲った凶作と旱魃は、カルムィク自治州にも穀物と牧草の完全な絶滅をもたらした。州の悲惨な飢饉は強まり、州食糧委はその倉庫に子供用に確保している数百プードのほかに、住民を支援する一フントの麦粉も持っていない。［……］目撃者は麦粉五プードと交換にわが息子を売り飛ばした事例を伝えている」[12]

中央政府からの援助は乏しく、冬が近づくにつれ代用食は雪に埋もれ、状況は悪化し続けた。チェー・カー情報は一一月のタタール共和国について、「経済状態は悪化している。人口の七〇％が飢餓にある」と伝えた。チュヴァシ州で「食糧事情は悪化する一方。援助がない。飢饉が原因の病気が増えている。医薬品と医療関係者はない」。一二月のウラリスク県について、「住民は様々な代用食を食用にしている。いくつかの地方では猫と犬を食用にしている。餓死のケースもある。チフスの伝染が広まっている。住民の三分の二が飢えている」と報じた。[13] チュヴァシ州では飢餓民の一〇％だけが援助を受け、二二年三月までの情報によれば餓死者は八〇万に達した。[14] タタール共和国に関するARA報告は、農民は

「夏の灼熱で荒廃した国土からできるだけ遠くへと明確な目的もなしに逃げ出した。冬の到来までに体力をなくすと考えて、自分たちの墓を掘ることを決めた」と、その絶望的状況を伝えた[15]。家畜は激減し、飢饉以前と比べて同共和国の家畜は二二年に馬は二五・〇％、牛は二一・五％、豚に至っては一・五％しか残されなかった。そのため老いも若きも自分で犂を牽き、自分の犂を持たない者は手鋤で耕作しているのが、通常の光景となった[16]。

二一年七月二一日と八月四日づけソヴェト中央執行委政令は、一、アストラハン、二、ツァーリツィン、三、サラトフ県、四、ドイツ人州勤労コミューン、五、サマラ、六、シムビリスク県、七、タタール共和国、八、チュヴァシ州、九、ウファー県ベレベイとビルスク郡、一〇、マリ州セルヌルとクラスノコクシャイスク郡（カントン）、一一、ヴャトカ県ヤランスク、ウルジューム、ソヴェトスク、マルムィジ郡のヴォルガ流域（一から八の地域）とウラル地方を凶作地域に認定した。だが、その地域は徐々に広がり、最終的に二一年一二月までに、バシキリア自治共和国［ウファー南方］、ヴォチャーク州［ヴャトカ県東南］、ヴャトカ県全域、カルムィク州、キルギス共和国、クリミア自治共和国、マリ州、ペルミ県（オハンスク、オサ郡）、ウファー全県、チェリャビンスク県がそれに加わった[17]。

被害規模について、二一年一〇月のポムゴル中央特別委員会［この組織については後述］で、ヨーロッパとアジアを含めたロシア共和国全体で総播種面積の四〇％に当たる二一〇〇万デシャチーナ［一デシャチーナは約一・一ヘクタール］以上と住民約三六〇〇万人の罹災が指摘され、第九回ソヴェト大会の報告によれば二一年末までにロシア共和国で公式に二二〇〇万人が飢餓民に認定され、最終的な数字では三七六二万一〇〇〇人の人口を持つ一八の県、州、共和国とウクライナ五県が被災し、それは人口の約三〇％に及んだとされる[18]。

第三節　困難な被害の確定

これが当時の公式の数字であるが、ネップ研究の第一人者であったポリャコーフは、文献により二二〇〇万から三七〇

〇万人までこの数字が大きく異なるのは、罹災者数の確定に様々な基準が用いられ、様々な文献で時期が異なる資料が用いられたためと説明するだけで、自身はこの数字を特定しなかった。[19] だが、元々この数字は飢饉認定地域の人口の総和であり、飢餓民の実数を反映せず、ヴォロネジ県のように飢饉地域に認定されなかった地方からもカニバリズムを含めた飢饉の事実が報じられたように、実際の飢饉は非認定地域にも及び、その罹災規模の特定は非常に困難な作業であるといえよう。[20]

さらに、飢饉地域の認定はきわめて作為的に行われたことを指摘する必要がある。二一年八月に飢餓民救済のためにロシア政府と合衆国商務長官フーヴァーを長とするARAとの間で行われたリガ交渉で、そこは相対的に豊作であるとの理由で、ウクライナは援助対象地域に含まれなかった。飢饉に晒されたキルギス共和国のうちアクモリンスクとセミパラチンスク両県は、中央ロシアのための穀物調達の対象になったため飢饉地域に認定されなかったように、ウクライナもそこがシベリアと並んで主要な穀物調達地域に設定されたため、そこでの飢饉は隠蔽された。[21] ウクライナの総人口の三六％を占めるステップ諸県（ウクライナ南部）、ザポロジエ、ドネツ、ニコラエフ、オデッサ、エカチェリノスラフ県が飢饉地域に認定されたのは、現物税徴収キャンペーンが基本的に終了した二二年一月一日であった。二二年八月に出されたARA報告書は、「地区自体が飢饉であると判明するまでヴォルガ流域に引き渡すため割当徴発が実施された」ことがニコラエフ県の惨状を招いたと、ソヴェト政府を非難した。[22] 後の飢饉に関する公式報告書で、ウクライナ全体で二一年の主要穀物の総収穫は平年（一六年）の三〇％しかなく、オデッサは一六・五、ドネツクは一二・三、エカチェリノスラフは五・一、ザポロジエは五・一、ニコラエフ県は三・九％の壊滅的収穫であったことが指摘されたが、そこで現物税は徹底的に徴収されたことはまったく言及されなかった。[23] こうして飢饉地域の認定はきわめて政治的理由によって左右された。

要するに、飢饉罹災地域と罹災者数を特定できる資料をわれわれは持っていないといわざるをえない。中央統計管理局の資料によれば、二一／二二年に五〇五万三〇〇〇人が餓死したとされるが、これも信用できない数字である。アメリカ

赤十字ロシア支部の情報によれば、二一年ですでに餓死者は一八〇〇万人に達していた。ＡＲＡの現地調査は一様に、交通が不便な奥地の統計資料はまったく信憑性がないと指摘する。調査官としてＡＲＡに帯同したカリフォルニア大学教授はウクライナの現地を視察して、「当局によって提供される統計資料はほとんど完全に信頼できない」と報告した。[24] ＡＲＡ資料によれば、二二年五月でロシア共和国の飢餓民は三二六九万一〇〇〇人、それにウクライナの九六六万五〇〇〇人を加えて、飢餓民の合計は四二三五万六〇〇〇人に達し、それは飢饉地方の人口の五六％を占めた。[25] だが、ＡＲＡはすべての飢饉地域を担当したのではなかったことも指摘する必要がある。二二年にベルリンで発行された文献は、飢餓民は一八九一年の凶作諸県で一七〇〇万人、〇六年に二一〇〇万人、一一年に二七〇〇万人を数えたが、二一年には二七県で四三〇〇万人が罹災したとの数字を挙げている。[26]

第四節　大飢饉の期間

次に、この飢饉はいつはじまったのかの問題がある。一七年夏にモスクワに隣接するカルーガ県で「子供が大量に餓死し、成人も餓死している」、リャザニ県に「本物の飢餓が訪れた」と報じられたように、農民と家畜の動員や封鎖経済などの戦時経済による農業生産の低落、配給制度の不備などに起因する大戦からの飢餓状態が、ボリシェヴィキ蜂起以後さらに強まり、ソヴェト＝ロシアは慢性的飢餓状態に晒された。[27] ある意味でこの大飢饉はその延長にあるが、レーニン体制下でこれらに人為的要因が加わった。一八年一二月の第二回全ロシア国民経済会議大会で、最高国民経済会議議長ルィコーフは、「食糧の不足だけでなく、戦争と対外情勢の結果生み出された飢餓に、われわれが配送すべき物資を消費者に配送することができないために引き起こされた人為的飢餓が合わさって作り出された」とすでに指摘するが、本稿ではそれとは一線を画する大飢饉を検討する。[28]

固有の現象として二一／二二年飢饉を検討する際に、その開始を二一年の凶作とする見解にも同意できない。「二〇年

はサマラ県にとって明白な飢饉年と見なければならない」と、アメリカ赤十字ロシア支部の論集も県コムポムゴル［後述］報告も同様に指摘するが、これはほかの地方にも該当し、ロシア全土に広がっていた二〇年の凶作が翌年の大飢饉の直接の引き金と見なすのが妥当と思える。カリーニンが第九回ソヴェト大会で「二〇年は飢饉に対する直接的警告であった」と明言したように、二〇年秋から翌年の大飢饉ははじまっていた。[29] すなわち、これは予想された飢饉であり、予防が一定可能な飢饉であった。

では、この終期はいつか。「新収穫の刈取りに伴い、飢饉の直接的尖鋭化は停止した」との理由を挙げ、中央援助機関であるポムゴル中央特別委の清算と飢饉後遺症（ポスレゴロダ）の回復を目的とするポスレゴロダ特別委員会を設置するとの二二年九月七日づけ党政治局決定を受け、同日の全ロシア中央執行委幹部会政令によりポムゴル中央特別委の活動を一〇月一五日で停止し、今後の活動をポスレゴロダ特別委に引き継ぐことが定められた。[30] これが公式の飢饉終息宣言である。だが、これは実際の飢饉の鎮定を意味せず、二三年四月になっても飢饉罹災一六県で飢餓民五五〇万人が登録されていた。[31] 早すぎる終息宣言であり、繁栄のネップといわれる時期にも飢饉は慢性的に続いた。[32]

① この時期に飢饉を指す言葉として一般的な голод のほかに、голодовка、царь-голод の言葉が特に区別せずに用いられた。本稿では区別せず、「飢饉」と訳出した。

② Сборник статистических сведений по Союзу ССР. С.131.

③ Девятый Всероссийский съезд советов: стеногр. отчет. М., 1922. С.23; Кандидов Б. Голод 1921 года и церковь. М.; Л., 1932. С.6-7. 奥田は前掲書で、二二年の大飢饉直前に民衆の間で流布していた一八九一年からはじまる「飢饉一〇年周期説」を紹介している（二九九～三〇二ページ）。

④ Сборник статистических сведений по СССР. С.131.

⑤ Российский Государственный архив Экономики [以下 РГАЭ]. Ф.478, Оп.2, Д.237, Л.14об.-15.

⑥ Голод: 1921-1922: Сб. Нью-Йорк, 1922. С.28. 二二／二三年飢饉の体験者へのサラトフ、ペンザ州でのアンケート調査によれば、回答者の七五％が二二／二三年に酷い旱魃があったと指摘し、残りは二一年と四六年ほど酷くはないが旱魃があったと指摘した（Кондрашин В. В. Голод 1932-1933 годов в деревнях Поволжья //Вопросы истории. 1991. No.6. С. 178.）。

⑦ Государственный архив Российской Федерации [以下 ГАРФ]. Ф.393, Оп.28, Д.276, Л.8.

⑧ Hoover Institution. American Relief Administration. Russian Unit [以下 HIA.RU]. 129-5.

⑨ HIA. RU. 77-3; Поляков Ю. А. Советская страна после окончания граждаской войны: Территория и население. М., 1986. С.159, 161.

⑩ РГАЭ. Ф.478, Оп.1, Д.2108, Л.1об.

⑪ РГАЭ. Ф.1943, Оп.7, Д.1016, Л.13.

⑫ Там же. Д.3749, Л.31-31 об. 元々農耕に不適な周辺非ロシア人地域では二一年三月にウファー県食糧委から、新収穫まで牛乳が農民の唯一の栄養になっていると報告されたように（там же. Оп.6, Д.469, Л.15об.）、これらの地域での畜産の壊滅は非常に深刻な意味を持った。

⑬ Центральный архив Федеральной службы безпасности Российской Федерации [以下ЦА ФСБ]. Ф.1, Оп.6, Д.500, Л.19, 56.

⑭ Поляков В. А. Драмы советской истории// *Вестник Челябинского государственного университета.* No.12. История. Вып. 31. 2009. С.76.

⑮ HIA.RU.160-1.

⑯ HIA.RU.344-14.

⑰ РГАЭ. Ф.1943, Оп.6, Д.957, Л.1,9-9об.; Оп.10, Д.4, Л.2.

⑱ Бюллетень Центральной Комиссии помощи голодающим ВЦИК; Декреты, постановления, инструкции, циркуляры, протокоры, справки [以下、Бюллетень ЦК помгол]. 1921. No.2. С.8; Девятый Всероссийкий съезд советов. С.25; Итоги борьбы с голодом в 1921-22 гг.: Сб. статей и отчетов. М., 1922. С.427.

⑲ Поляков Ю. А. Переход к нэпу и Советское крестьянство. М., 1967. С.287-289.

⑳ ЦА ФСБ. Ф.1, Оп.6, Д.500, Л.91, 101, 106, 112, 117, 118; Fisher H. H. The Famine in Soviet Russia. 1919-1923. N.Y., 1927. p.436.

㉑ 両県での調達問題については梶川伸一『幻想の革命』、二六五～六七ページを参照。ウクライナにあった旧年の穀物貯蔵はロシア共和国から押しかける担ぎ屋によってすでに汲み出されていた（см.: ГАРФ. Ф.130, Оп.5, Д.796, Л.23）。

㉒ Итоги борьбы с голодом в 1921-22 гг. С.253; HIA.RU.18-6, 146-8.

㉓ Итоги борьбы с голодом в 1921-22 гг. С.254.

㉔ Драма Российской истории: большевики и революция. М., 2002. С.382; Голод: 1921-1922: Сб. С.28; HIA.RU.107-1; 110-7; 133-6. 二一～二二年飢饉の犠牲者数は最少で五〇〇万、最大で七〇〇万（コンドラーシン、前掲論文（奥田央編、前掲書所収）、四九七ページ）。

㉕ HIA.RU.77-3.

㉖ Народное хозяйство России за 1921 г. С.11.

㉗ Продовольствие и снабжение. 1917. No.8. С.19. これについての詳細は、梶川伸一『飢餓の革命』、名古屋大学出版会、一九九七年、同『ボリシェヴィキ権力とロシア農民』、ミネルヴァ書房、一九九八年を参照。

㉘ Изв. ВЦИК. 1918. 25 дек.

㉙ Голод: 1921- 1922: Сб. С.39; Книга о голоде: Экономический, бытовой, литературно - художественный сборник. Самара, 1922. С.114; Девятый Всероссийкий съезд советов. С.25.

㉚ РГАСПИ. Ф.17, Оп.3, Д.311, Л.2; Итоги борьбы с голодом в 1921-22 гг. С.424.

㉛ РГАЭ. Ф.1065, Оп.2, Д.50, Л.63.

㉜ См.: Есиков С. А. Голод 1923-1925 гг. в Тамбовской деревне// Государственная власть и крестьянсво в конце XX - начале XXI

第二章　大飢饉の実態

第一節　旱魃がはじまる

サマラ県の報告書で、戦前は「不作は平均して七年ごとに発生した」といわれたように、農民は収穫間近になっても慢性的凶作に慣れ、事態を深刻視せず、それは現実の被害を大きくした。二〇年七月にカルーガ県コゼリスク郡から、「現在あらゆる代用食、雑草、団栗などを食べ」餓死も記録されたと報告されたように、二〇年夏に中央農業地帯は旱魃による厳しい凶作に見舞われた。九月二一日の人民委員会議［閣僚会議］は、リャザニ、カルーガ、トゥーラ、ブリャンスク、オリョール県を凶作県に認定し、そこの実地調査を行った結果、ツァーリツィン県が加わった。[1] だが、実際に食糧人民委員部［食糧関係省］の凶作援助指令によれば、二一年二月にその対象者は三一三万八〇〇〇人を数えたが、国家からの援助はこれら地域でもほとんど行われず、原則として県内食糧資源の再配分がその措置となった。[2]

二〇年の旱魃により凶作が引き起こされた事実は、筆者が確認しただけでも、西部スモレンスク県から東部ペルミ県に至る、タムボフ、ヴラヂーミル、モスクワ、イヴァノヴォ＝ヴォズネセンスク県など多数から寄せられた。シベリアのトムスク県ノヴォニコラエフスク郡の郷で旱魃とバッタによって二〇年収穫の大部分が全滅した。[3] タムボフ県の事情は県執行委によって、二〇年「夏の気象条件は穀物の収穫にまったく不利に作用した。五月から秋蒔きの刈り入れまで、県内で激しい旱魃が続き、ほんの時折わずかな雨があっただけである。秋蒔きの刈り入れ後に旱魃はいっそう激しさを増した」と報告された。[4] すでにロシア全土の至る所で凶作が見られたものの、来春の播種拡大への措置が検討されただけで、凶作認定県以外のこれら多数の罹災の事実は党中央では完全に無視され、その要因として地方活動家から挙げられた割当徴発

の廃止は、中央機関でまったく議論の対象とならなかった。[5]

二一年の飢饉地域は、二〇／二一年度［八月一日からはじまる年度］の割当徴発で一〇〇〇万プード以上の割当徴発が課せられた以下の突撃県と多くが重なっている（括弧内は割当量：プード）。ウファー（一六八〇万）、サラトフ（一四五〇万）、サマラ（一四〇一万六〇〇〇）、オレンブルグ（一一七七万六〇〇〇）、タムボフ（一一五〇万）、ヴャトカ（一〇七五万）、チェリャビンスク（一〇二二万三〇〇〇）、エカチェリンブルグ（一〇〇〇万）、タタール共和国（一〇〇〇万）がこれである。消費諸県一〇県の割当量の合計は一五八六万プード、遂行率は二〇年一二月一〇日に九一・二％であったのに対し、突撃諸県の遂行率は五二・七％しかなく、これら諸県の食糧資源はすでに枯渇し、異常気象がそれに拍車をかけた。[6]

サマラ県でも旱魃の兆候はすでに二〇年夏に認められ、県全体でこの時から一年間の降水量は平年の半分しかなかった。秋の降水は特に県北部で異常に少なく、スタヴロポリ郡では平年の一四％以下となった。積雪は少なく、二一年の春が近づくとともに太陽は容赦なく照りつけ、こうして、異常に早い春の訪れとともに北部郡から、秋蒔き穀物がまず枯れているとの情報が入るようになった。四月を待たずして雪は完全に消えた。

同県での異常気象は次のような公式の数字に現れた。過去二三年間に四～六月の三ヶ月間の平均降水量は約一〇六ミリであったが、二一年は七ミリしかなかった。この一七年間（一九〇三～二〇年）の平均気温は四月に六・四、五月に一六・三、六月に二三・八度であったが、二一年はそれぞれ一一・五、二五・〇、三一・三度であった。夏まで全県でほとんど一滴の雨も降らなかった。五月半ばでライ麦は四〇センチ以下で生育が止まり、出穂しはじめた。通常より二週間早く実をつけた結果、平年作よりライ麦の収穫は激減した。[7] このようにして旱魃続きの県に穀物はまったく残されず、二一年春を待たずにこの一年間で協同組合の家畜頭数は三四六五万三三〇頭から二九三万六八一二頭に激減し、数の減少に加えて家畜は年々小さくしか肥育しなくなった。[8] 割当徴発、その他の課税、勤労賦課などの過重な苛斂誅求により零落した農民はすでにこれに耐える力は残されていなかった。五月二五日のプガチョフ郡執行委幹部会会議は、餓死者が出たことを確認した。[9]

これに類した旱魃は多くの地方で認められた。ウラル地方にあるヴャトカ県で二一年春から三ヶ月間は雨が降らず、四月の降水量は例年の一〇％で、異常な旱魃に加え、台風と降霜は住民が待望していた収穫を全滅させた。凶作地方では、春蒔き穀物は花をつけたまま急ぎ刈り取られ、さらに収穫を引き下げた。タムボフ県では時折ほんのわずかな雨が降る以外は、五月から秋蒔き穀物の刈入れまで厳しい旱魃が続いた。キルサノフ郡で五月下旬にはもうライ麦が出穂し開花しはじめ、いくつかの地方では秋蒔き穀物が燃え上がるほどであった。六月七日に一〇分ほど雨が降ったものの水分は地中に浸透する前に蒸発し、そこでの収穫はデシャチーナ当たり五から一三プードしかなかった。これらの県はサマラと同様に昨年に続く旱魃被害であった。多くの地方がこのようであった。[10]

このような旱魃は収穫に大打撃を与え、サマラ県の二一年の平均収穫はデシャチーナ当たり二プード［平年の二〇から三〇分の一］しかもたらさず、それは一、二ヶ月で食い尽くされた。旱魃の影響を受けた小麦は一八年（括弧内）と比べてその劣化は著しかった。丈四〇・三センチ（七五センチ）、穂の長さ六・二センチ（八・一センチ）、穂の穀粒数一二・五粒（二一・八粒）、一〇〇〇粒の重さ一八・二六グラム（二九・九二グラム）しかなく、穀物の成長に充分な養分を吸収できず、六月下旬の午後一時で気温三六度、湿度一一パーセントに達した猛暑が災厄を完全なものにした。穀物は早すぎて熟し、萎れた。県執行委議長の報告によれば、八月ですでに飢餓民は約二八〇万の県人口のうち六〇万人を占め、二一年末にその数は一八〇万人に達し、彼らは代用食さえもすでに食い尽くした。[11]

第二節　飢饉の実状

ヴォルガ流域のシムビルスク県を訪れたARA活動家はそこの風景を次のように描いた。生命の兆候が見られるなら、その村はまだ飢えていない証拠である。「村の通りに馬も犬も見られず、藁葺きのほとんどが屋根から抜かれていたり、出会う人々が生きた人間というより骸骨のようであったりしても、その村は飢えているのではなく、栄養失調の村でしか

ない」。「墓地のような静寂、砂漠のような死、これが飢饉の村である」[12]

飢饉の実状に関して様々な報告が行われたが、これらのうちでもっとも有力な情報源が、地方チェー・カーの飢饉に関する定期報告であり、これら極秘扱いの情報は凄惨と無力感で埋め尽くされている。以下は二一年一〇月分からの抜粋である。「エカチェリンブルグ県。食糧不足のために孤児院で壊血病が広まり、子供の犯罪が増加している」。「チュヴァシ州。食糧事情はきわめて悪く、農民は中央からの援助を当てにしているが、当面はない」。「オレンブルグ県。オレンブルグに三六〇〇人の飢餓民が群れをなしている。避難民の中でチフスが猖獗している。県保健部は死人を処理することができない。市内にはまだ処理されていない一五〇人の死体が残っている」。「サマラ県。飢饉地方からの移住民が全県に伝染病を広めている」。「タタール共和国。住民は代用食を摂っている。アルスク郡で二〇五件の餓死が記録された」。一三万五一六人の人口を数えるタタール共和国スヴィヤジスク郡からの情報によれば、飢餓民は一二万四六二七人、栄養失調は一万一六一一人、餓死者は八人であった［数字はママ］。メンゼリンスク郡で一八件の餓死があった。[13]

村ごとの移住が増えるに伴い急増した捨て子や、飢饉地域から疎開した大勢の子供が収容される孤児院の環境は最悪であった。オレンブルグ市［キル共和国の首都］の孤児院で、下着、燃料、食糧がないため一日一五〇から二〇〇人が死亡し、その管理責任者は職務怠慢の廉でチェー・カーに逮捕された。約一七〇〇人の子供を受け入れたブリャンスク県には「疎開した子供のための建物に設備はなく、食糧も衣類も履物もない」。一二月にチェリャビンスク県トロイツク郡で「食糧がないために孤児院が閉鎖され、二七〇八人の子供は見殺しにされた。孤児院での死亡率は六〇％に達している」。これ以後飢饉の深まりとともに状況はさらに悲劇的になるが、累々と続く惨状のこれ以上の引用は無用であろう。[14]

第三節　伝染病の猖獗

民衆を死に追いやったのは飢えだけではなかった。飢饉はつねに伝染病を伴い、膨大な犠牲者を残した。一七年に食糧

危機がはじまるとともに伝染病の流行もはじまり、この時期にもっとも多くが罹患したのはチフスであった。劣悪な衛生状態に栄養失調が加わり、その猖獗は各地で認められた。リャザニ県カシモフ郡で一八年五月に、多くの家族は暗く狭い家屋に居住し、何ヶ月間もパンだけでなくあらゆる食糧をまったく受け取らず、工場労働者の間で「栄養失調のためにチフスの流行がはじまった」。マロヤロスラヴェツ郡でも栄養失調のために、伝染病の罹病が尖鋭化していると報告された。通常は夏季に流行する伝染病が、ロシアでは狭く不衛生な家に暖を求めて一家が集う冬に特に流行した[15]。

内戦が多数の難民の移動を余儀なくさせ、飢饉地方では農民は群れをなして（時には村丸ごとが）故郷を捨て食糧を求めて各地を彷徨し、サマラ県ポクロフスク市の人口は流入する避難民のために三倍に増えた。そのため、一八年八月にオリョール県執行委が担ぎ屋とコレラとの闘争の目的で、ソヴェト権力の認可なしに県内に入ることを禁止したように、多くの地方当局は県や市への立ち入りを禁止した。こうして、彼らの多くは鉄道駅や埠頭で足止めされ、そこには自然発生的に難民キャンプが発生し、収容された避難所などで余儀なくされる劣悪な環境が拡大をいっそう強めた[16]。一八年には世界中がそうであったようにスペイン風邪も大流行し、クルスク県チム郡では棺桶の材料にも不足した[17]。

一九年にはさらに悪化し、サマラ県ブグリマの街路に信じられないほどの数のチフス患者が横たわり、そのような患者は病院に運ばれても二時間以内に死亡した。「発疹チフスがサマラ市だけでなく郡部でも猛威をふるっている。薬はなく、栄養は悪く、病院は満杯になっている。患者は看護もなく床に寝かされている[18]」

二〇年になるとすでに状況は絶望的になる。春の党中央委への報告書のごく断章は次のように伝えている。ヴャトカ県グラゾフで「再びチフスが猛威を振るいはじめた」。コストロマ県ブーイで「チフスが猛威をふるっている。酷くなる一方である」。ニジェゴロド県ルィスコヴォ=プリヴォヂスコエで「チフスが酷く流行し、大勢が死んでいる」。ニジェゴロドで「医者はいない。[……] チフスは徐々に広がり、至る所が汚物と病原菌にあふれている」。「オムスクだけでチフスにより一万五〇〇〇人以上が死亡した。墓地で死体は棺桶なしで放置されている[19]」

赤軍兵士も飢えと病から逃れることができなかった。ヤロスラヴリ第三中隊から二〇年二月に、二日間でパン一フント、スープ一杯、ピロシキ三個しか受け取らず、「非常に飢えている」と報告されたような食糧事情にあり、不衛生な兵舎で集団生活をおくる兵士も伝染病に感染する条件が揃っていた。スモレンスク県の兵士は、われわれのほとんどがチフスに感染していると訴えた。二〇年初頭にシベリアで活動していた部隊はチフスに感染したため毎月三〇％が減員していると報告された。[20] 赤軍の食糧事情も二一年にはさらに悪化し、二〇年の四九一〇万プードに対して二六八〇万プードしか受け取らなかった。[21]

二一年には飢饉とともに伝染病の流行はほとんど至る所から伝えられるようになる。北カフカースのロストフ＝ナ＝ドヌでは六月に労働者の間でコレラ感染がはじまり、飢饉が強まるにつれその流行は顕著になった。ヴォロネジ市でコレラ患者は六月下旬に一二六人を数え、ニジニェウディンスク郡でコレラの死亡率は七〇％に達した。ヴォロネジ県に接するクルスク県の郡でコレラ感染が続き、全県で七四七人のコレラ患者を数え、死亡率は四七・四％に達したが、医療関係者と医薬品はまったくなかった。チェリャビンスク県トロイツク市でのコレラ患者の半数以上が死亡した。サマラ県でもコレラ患者は増え続けた。オリョール県では全部で一〇六五人がコレラに感染し、三〇七人が死亡した。ペンザ県で七三人がコレラに感染し、二一人が死亡した。ドイツ人コミューンで餓死のケースが拡大するとともに、伝染病は抑えようもなく広がった。これら上記の七月のヴェー・チェー・カー報告からの抜粋だけでも異常な流行を見ることができる。[22]

ヴォルガ流域諸県からの疎開先となったシベリアでは、「避難民の大量の流入がチュメニ県にも現れ、コレラのような伝染病を持ち込んだ」。こうしてチュメニ市は大々的にコレラ感染が広まり、その死亡率は九〇％に達した。一二月になるとノヴォニコラエフスク県にチフスが猖獗し、発疹チフスに一七八人、回帰熱に五五〇人、腸チフスに九四人、原因不明に一〇〇人が感染した。死亡率は発疹チフスが二〇％、回帰熱が四一％、腸チフスが六一％とされた。オムスク県でもスラヴゴロド郡を中心に流行し、二一年中に全県で発疹チフスに一五一八人が、回帰熱に四九五五人が、腸チフスに三四

一六人が、原因不明に一一三四人が感染した。[23] 地方によっては、餓死者よりも伝染病による犠牲者の方が多かった。政府公式報告書によれば、ウファー県で二一年六月からの一年間に、餓死者四万八〇七八人に対し伝染病による死亡者数は九万八五一二人と、死者合計の六七・二％を占めた。[24]

第四節　カニバリズム

飢えが進むとまず頬が痩け、顎がせり出し、眼が虚ろになり、手足はやせ細り、腹が浮腫みはじめ、「意識が朦朧とし、嘔吐がはじまり、口腔と舌の皮が破れ、最終的に死に至る」。子供は体重の二〇パーセント、成人は四〇パーセント、老人は五〇パーセント以上を失って死亡し、そのため子供は三日間以上食事なしでは生存できず、このため飢餓民の間で特に子供の死亡率は高かった。[25] だが、この時の飢饉の恐怖は餓死だけではなく、広く普及したカニバリズムの事実であった。

二一年一二月三日のサマラ県執行委会議で議長アントーノフ＝オフセーエンコは、すべての代用食が食い尽くされた県内の食糧事情に触れた際に「人々は自分自身を食わなければならない」と発言したように、当時すでに認められていたカニバリズムの衝撃的事実は機関紙などでも忌避されることなく多数が公表された。[26]

早くも党県委員会機関紙『コミューン』二二年一月一五日号は、「パンと肉を奪われたサマラ県の広大なステップ郡で悪夢が演じられ、軒並みに人肉食людоедство の異常な現象が認められる」として、「墓場から死体を手に入れ、一〇家族がそれを食している」プガチョフ郡の例、「地中から掘り出した人間の胴体を自分の家族とともに食用にしていた」ブズルク郡の例、「死んだ一三歳の娘エレーナの胴体を残った自分の三人の娘と分け合っていた。子供は自分の姉妹の肉を食べたが、母親は自分の娘の屍体を食用にしなかった。現地当局がこの屍肉食трупоедство を摘発したとき、娘の死体から頭部、踝、胸部だけが残されていた。腕の骨は村人によって食用に盗まれていた」プガチョフ郡の例などを記載した。この記事は、「人肉食の犯人は自白し、それを極端な飢えで説明した。これらは事実、正確には、事実のごく一部である」

人肉食の嫌疑者（エカチェリンブルグ）：HIA 所蔵

と締めくくられた。同機関紙二月二日号、二月一七日号にも「バラコヴォ郡で一月と二月に四〇件の屍肉食と人肉食が、市で八件が公式に記録され、このほか、調理された人肉の取引が三件確認された。人肉を食した六人が自殺した」と次々とカニバリズムの実例が公表された。[27]

オレンブルグでは次のような事件が露見した。二一年一二月に火事で焼け崩れた郵便局の跡地から切断された人間の頭部が見つかった。捜査が開始され、犯人は逮捕された。彼は友人を殺害し、死体を袋に詰めて持ち帰ろうとしたが、袋が重すぎたので頭部を切断し、郵便局の開いていた窓に投げ捨てたと自供した。死体の残りを持って彼は市場に行き、安食堂のペルシャ人にその肉を売った。これが発覚して直ちに地方当局により、ミートボール、カツレツ、あらゆる細切れ肉の販売を禁止する法令が出された。[28] 二二年二月にアクチュビンスク県の市場で人肉の販売があったため、生肉の販売を禁止する命令が出され、四月にバシ共和国で「屍肉食と人肉食との闘争と人肉商売の阻止」に向けられた特別決議『人肉食について』が採択された。[29]

報告書によれば、ほとんどの飢饉地域でカニバリズムが

認められた。ハリコフ大学教授は、人肉食と屍肉食についてウクライナの飢饉五県を調査し、殺人が行われ人肉食に至った信憑性の高い二六件と殺害された死体が販売された七件を確認し、あらゆる県で屍肉食は日常的であったと結論づけた。[30] 二二年にカザンでＡＲＡの活動に従事していた医師は、実行犯は常に犯行を隠し、また屍肉食は一般的になったので特別な事件として記録されることがなく、正確な数字を挙げるのは不可能としながらも、二一年秋から二二年春までの次の統計を示した。タタール共和国で屍肉食七二件、カニバリズム二二三件、同じくバシ共和国で屍肉食二二〇件、カニバリズム五八件、サマラ県で屍肉食六〇件（彼によれば屍肉食はほとんど記録されなかったのでこの数字は少なすぎるという）、カニバリズム二〇〇件、ウファー県でカニバリズム五六件、屍肉食は記録されなかった。最近の研究によれば、ウラリスク県で二一年から二三年までに人肉食三五六件、屍肉食四三七件、動物の屍肉食二一三件を数えた。[31]

二二年二月の県チェー・カー情報によれば、チェリャビンスク県では「人肉食は通常の現象となった」。七月の第一〇回サマラ県党協議会で「全住民の九五％が飢え、屍肉食はもう記録されなくなった、それは通常の現象となり、人々は人肉食に至った」と報告され、第九回ソヴェト大会で同県執行委議長が「悪夢の情報」を公然と語ったように、これは広汎に認められる現象となり、タブー視されていなかった。[32] だが、二二年の収穫期を過ぎるとこれらの事実は次第に秘匿されるようになる。「ここ［プガチョフ市］と郡一帯に数日間流布したプガチョフでのカニバリズムの報告は執行委によって調査され、根拠なしと宣告された」として、郡執行委内務部部長は郡機関紙で、「それらの風聞は嘘で、［……］カニバリズムに関する嘘の風聞を流した犯人は監獄に送られるであろう」と、このような風聞の流布を厳禁した。[33] この流れの変化の時期がポムゴル中央特別委の解散期と一致するのはおそらく偶然ではない。大飢饉の幕引きがはじまっている。

① НІА.RU.6-6; 106-1; ГАРФ. Ф.393, Оп.10, Д.21, Л.65; Ф.130, Оп.4, Д.207, Л.113, 116; РГАЭ. Ф.1943, Оп.1, Д.590, Л.40.

② РГАЭ. Ф.1943, Оп.6, Д.40, Л.1, 11.

③ ГАРФ. Ф.1235, Оп.56, Д.9, Л.53, 100, 197, 200, 334; Оп.94, Д.15, Л.176; РГАСПИ. Ф.17, Оп.65, Д.656, Л.60; РГАЭ. Ф.1943, Оп.6, Д. 41, Л.469.

④ Там же. Д.643, Л.78.

⑤ См.: РГАСПИ. Ф.19, Оп.1, Д.389, Л.64-65.

⑥ Осинский Н. Правда. 1920.26 дек.

⑦ Вестник Самар.губ. Экон. совещения. 1921. No.1. С.74-77, 119; Коммуна. 1921.19 фев.; Fisher H. H. Op.cit. p.497, 504; РГАЭ. Ф. 478, Оп.1, Д.2108, Л.101об.; HIA.RU.12-1.

⑧ Коммуна. 1921. 23 фев. 例えば、サラトフ県で一六年に一八プードあった豚の重量は一九年春には四プードを超えなかった（РГАЭ. Ф.1943, Оп.3, Д.531, Л.305）。

⑨ ГАРФ. Ф.393, Оп.28, Д.229, Л.263.

⑩ Вятская правда. 1921.10 июля; РГАЭ. Ф.1943, Оп.6, Д.449, Л.61; Д.584, Л.21-22; Тамбовский пахарь. 1921. 7, 19 мая; Изв. Тамбов. губ. исполкома. 1921.17 июня.

⑪ Коммуна. 1922. 27 янв.; ГАРФ. Ф.393, Оп.28, Д.276, Л.25об.

⑫ HIA.118-4.

⑬ После голода. 1922. No.1. С.87.

⑭ ЦА ФСБ. Ф.1, Оп.6, Д.500, Л.12-20, 43,71.

⑮ Петроградская Правда. 1918.12 мая; Изв. Наркомпрода. 1918. No.24/25. С.59. 例えば、一一一年にロシアの飢饉地区で発疹チフスの患者数は、二月の二万七七五人に対し八月は二六三三人であった（HIA.RU.10-5）。

⑯ Голос трудвого крестьянства. 1919. 23 мая; Изв. Петроградского совета. 1918.1 июня; 6 авг.

⑰ Изв. Наркомпрода. 1918. No.24/25. С.51.

⑱ РГАСПИ. Ф.17, Оп.65, Д.141, Л.211об. 公式の数字によれば、一八年に伝染病（回帰熱、チフス、天然痘、赤痢など）で一一万五八〇〇人が、一九年に九一万二〇〇人、二〇年に一〇九万九〇〇人が死亡し、その中でも発疹チフスがもっとも多く、それにより一九年に七六万四〇〇〇人、二〇年に八三万四〇〇〇人が死亡した（Население России в XX веке: исторические очерки. Т.1. М., 2000. С.101-102）。

⑲ РГАСПИ. Ф.17, Оп.65, Д.453, Л.102, 106-107об., 75об., 84, 132.

⑳ Там же. Л.17, 53, 123об.-125об.; РГАЭ. Ф.1943, Оп.1, Д.789, Л. 90об.

㉑ Народное хозяйство России за 1921 г. С.52.

㉒ РГАСПИ. Ф.19, Оп.3, Д.225, Л.100; ЦА ФСБ. Ф.1, Оп.5, Д.175, Л.6, 95, 17, 18, 22, 26, 30.

㉓ Там же. Д.444, Л.2, 47, 124.

㉔ Итоги борьбы с голодом в 1921-22 гг. С.267.

㉕ Стрельцов И. Т. В центре голода 1921-1922 г. (Пугачевский уезд). М.; Самара, 1931. С.27; Горев Мих. Голод. М., 1922. С.7; Книга о голоде. С.32.

㉖ HIA.RU.12-1.

㉗ Коммуна. 1922.15 янв.; 2, 17 фев.

㉘ HIA.RU.68-6.

㉙ Драма Российской истории. С.382.

㉚ Fisher H. H. Op.cit. p.436.

㉛ HIA.RU.94-10; Тулепов Н. Ж. Голод 1921-1923 гг. в Западном Казахстане.// Государсвенная власть и крестьянство в конце XIX-начале XXI века.Коломна, 2009. С.196.

㉜ РГАСПИ. Ф.5, Оп.1, Д.2629, Л.14; Поляков В. А. Указ. статья. С.77; Девятый Всероссийкий съезд советов. С.38.

㉝ HIA.RU.94-10.

第三章　ソヴェト政府の救援策

第一節　救援活動の困難

二一年六月二六日づけ『プラヴダ』紙上で、一八九一年を凌ぐ罹災者二五〇〇万人の飢饉の存在が初めて公式に報道され、同月三〇日づけ『経済生活』紙は農民が大量に村を捨てている飢饉地区の惨状を伝え、中央権力による飢餓民救援活動の組織化がはじまったが、すでに至る所から飢饉の情報が持ち込まれ、これはあまりにも遅すぎる措置であった。

七月一日づけ国防会議布告『凶作を蒙った地域での二一年秋蒔き区画の播種について』の中で初めてサマラ県などを凶作地方と認定したが、そこでの救済策は、完全播種のため収穫した秋蒔き穀物を播種以外に消費するのを禁じ、需要量を超える種子を持つ経営から不足する経営に供給するため余剰分を収用するよう義務づけ、秋蒔き区画から国税としての現物税を免除し、種子貸付の返済を二二年まで猶予することを定めただけで、飢餓民への具体的な支援策には何も言及しなかった[①]。

ようやく七月一八日づけで全ロシア中央執行委の下に、農業、外国貿易、食糧人民委員部代表を含む飢餓民援助（ポムゴル）中央特別委（議長カリーニン）が設置され、それに飢饉との闘争に関する最高権限が付与された。この法令では地方組織は規定されなかったが、それは直ちに修正され、九月二二日づけ全ロシア中央執行委決議はロシア全土に県・郡・郷コムポムゴル［援助地方特別委］の設置を定めた。だが、それらの多くは「ヴォルガ流域諸県飢餓民援助」の名称が冠せられ、あくまでもこの地方に飢饉を限定しようとする、このときの中央権力の意図は明白であった[②]。

当初の中央機関による救援活動は、ヴォルガ流域諸県への間近に迫った秋蒔き播種の種子の確保に集中された。八月四日づけ全ロシア中央執行委幹部会会議は、飢饉県ですべての穀物を種子材に投入するため食糧税を県内需要のために徴収

することを決定し、このような根拠で、飢饉が深まるにつれ徴税が強化された。飢饉との闘争特別委の構成が承認された八月九日の党中央委総会で、「食糧税の徴収への反対行動またはその納付が些かでも遅延する兆候があれば、もっとも厳しい強制的措置を採り」、そこに軍事部隊と革命裁判所巡回法廷を差し向け、厳重に処罰するとの徴税方針が確定されたのは象徴的である。③

したがって、この認定地域以外は悲惨であった。ペルミ県のすべての郡を視察した全ロシア中央執行委全権ノギーンは早くも八月二九日づけで現地から、「飢饉は想定されていたよりも広い範囲に重苦しく広がり、いくつかの地方やここペルミでも現在までコムポムゴルのおもな関心は、ヴォルガ流域諸県への援助の組織化に払われていた。しかし、サラプル郡全部、オサ郡の一五郷、オハンスクの九郷、クングールの六郷はそこよりも状況は酷い。それは国家種子材からの種子援助が禁止され、種子の引渡しがあまりにも遅く開始されたことでさらに強まった」と警告したが、同県でオサとオハンスク郡だけが二一年末に飢饉に認定された。④

ヴォルガ流域諸県の穀物支援にさえ国内原資が不足するため、飢饉地域の追加認定にはきわめて慎重であった。八月一八日の全ロシア中央執行委幹部会会議で、ウファー県ウファー、ズラトウスト郡、キル共和国で、ウラリスク、オレンブルグ、アクチュビンスク、ブケイ県、クスタナイとアダエフカ特別郡を除くクスタナイ県、マリ自治州コジモデミャンスク郡、カルムィク州を飢饉県と認定したが、バシキリア共和国、スタヴロポリ県、ヴォチャーク州からの現物税の免除が決定されたのは一〇月一〇日づけ同会議であった。とはいえ、ここでは国税が免除されただけで、地方税としての現物税は徹底的に徴収され、二一年末に飢饉に認定されたグラゾフ郡で一九％、デベスィ郡で八六％の遂行率であった。一一月の調査報告で、州内の課税は重い負担であったと総括された。⑤だが、これら地方税が現地の飢餓民救済に向けられたならばまだ救われたかもしれない。

九月一七日づけサマラ県執行委命令一六六号は、中央からの食糧支援は期待できないとして、徴収された穀物は「郡で

凶作の大きな被害を受けた農民への供給のために納付されると宣告」し、郡執行委に現物税の厳格な徴収を命じた。だが、同月二一日づけ郡食糧コミッサールへの秘密回状は、「現物税、製粉税、その他の納付によって徴収された穀物は、二一年九月一〇日づけで入電した食糧人民委員部訓令三〇七一七一号に準じて、「現物税の」完全な実現に至るまで農民住民の間で配分されない」ことを指導指針として通知した。飢饉県での税の完遂は考えられず、この秘密回状は、そこで徴収された穀物は飢餓民救済に回されなかったことを意味した。[6]

一〇月二〇日づけポムゴル中央特別委条令によれば、「飢饉との闘争資金は国家資源とロシア内外からの寄付からなる」と言及されたが、実際には地方での活動はほとんどが地元の原資と寄付に依存した。一二年春にペンザ県サランスク郡執行委議長は、「中央や県の組織を当てにせず、ソヴェト組織からの一定控除、見世物、講演会、バザールから、個人的寄付、またはサランスク市場での法令違反に対する没収のような地方財源から援助を引き出し」、それ以外の援助はなかったと報告した。サマラ県では、その資金源は地方の「税金、自発的寄付、宝くじであった」。このようにして、ロシア共和国の六七県、自治共和国、州に関する包括的資料によれば一年間で食糧七七〇万プード、ウクライナで三〇〇万プード以上、シベリアで七〇万プード以上が集められた。[7]

第二節　教会の取り組み

飢饉救済は「相互扶助」の原則で行われたが、この原則から「反ソヴェト的」組織は排除され、その一つがロシア正教会であった。これまで飢饉の際に教会は飢民救済に参加する伝統的慣例があり、教会側のこれへの対応は素早かった。総主教チーホンは七月早々にニューヨーク司祭への電報で、飢饉ロシアへの援助を訴えるアピールを表明した。[8]

その一方で、国内で教会による飢民救済の寄付集めのため、チーホンはこれまでの権力と教会との微妙な関係に配慮し、組織的寄付集めとそれを配分するための教会組織である教会委員会の活動に一定の保証を求める書簡を、八月五日づけで

ポムゴル中央特別委へ、八月一七日づけで全ロシア中央執行委に提出した。これら書簡は、教会委員会は教会での説教などによって寄付を集め、これら救援物資とその活動は労農監督部の統制を受けないことの確約を求める、ほぼ同じ内容であった。八月一七日のポムゴル中央特別委幹部会会議は総主教チーホンの書簡について、「ロシア正教会による教会委員会の設置に反対せず、[……] それらの活動を有益と認める」決議を出した。理由は公表されなかったが、おそらくレーニンやトロツキーからの反対に遭い、この幹部会決議はチーホンに通知されなかった。そのため、彼は八月三一日づけ全ロシア中央執行委への書簡で、できるだけ早急な承認を要請したが、その後も公式の通知は届けられなかった。[9]

しかし、二一年の冬が近づくにつれ、スタヴロポリ県から報告されたように、至る所で一様に「寄付の流れはほとんど停止した」。一二月の『サマラ県コムポムゴル通報』に掲載された書簡は、「新聞は秋蒔き播種の順調な総括について楽観的な報道を流した。[……] だが、ここヴォルガ流域諸県で飢饉は日ごとに新たな無惨な侵略を行っている。それは減退しているのではなく、強まっている」として、「救援の第一波に続いて、いくらかの凪が訪れた」現状に警鐘を鳴らし、飢餓民救済の強化を訴えた。寄付集めが上からのキャンペーン的性格を帯びていた以上、秋の『飢餓民援助週間』が最後の大衆的寄付集めの機会となった。ポムゴル中央特別委員であり社会保障人民委員であったヴィノクーロフは『援助週間』について、「二〇〇万プード以上の穀物と約五〇万金ルーブリを提供したが、それはまだ充分に展開されなかった」と、その限界を指摘した。[10]

こうして救援事業に教会が不可欠に思われ、一二月八日の政治局会議は、飢餓民救済に関する宗教団体の申請を承認する旨のカリーニンの提案を採択したが、これを公表不要とした。この決議は同日の全ロシア中央執行委幹部会で承認されたが、政治局決定により決議原文は抜粋の形で関係宗教団体に発送された。[11]

だが、この教会への対応は二二年春以後激変する。レーニンとトロツキーの発意により、この大飢饉が頂点を迎えようとする時期に、飢餓民救済の名目で教会貴重品の強制的収用が強行された。チーホンは二二年二月二八日づけの訴えの中

でこれまでの教会の救済活動を振り返り、礼拝に関わりのない寄付には応じるが、「聖なる什器、その他の礼拝用教会物品を含むあらゆる貴重品の寺院からの収用」は「神聖冒瀆」であるとボリシェヴィキ権力を厳しく糾弾し、以後両者の関係は修復不可能なまでになった。[12]

この問題に立ち入る余裕はないが、次のことを指摘する必要がある。教会弾圧への民衆の抵抗は大きく、党中央にはこのキャンペーンに対して待機的な気分が漲っていた。それを一変させたのが、イヴァノヴォ=ヴォズネセンスク県シュヤ市で三月一五日に発生した収用に反対する民衆との衝突事件であった。より正確には、『レーニン全集第五版［ロシア語版］』にも掲載されなかった中央委政治局員のために中央委書記モーロトフに宛てたレーニンの三月一九日づけ厳秘書簡であった。この中で彼はまずシュヤ事件を、チーホンを中心とした教会守旧勢力による反ボリシェヴィキ的陰謀の一環と位置づける。だが、このような決戦の考えは、「戦略的に大きな過ちを犯していると思慮する。逆にわれわれにとって、まさに現在は特に好機であるだけでなく、一般的に敵軍を一人残らず殲滅し、何十年にも亘ってわれわれが必要な地歩を確保するのに完全に成功する千載一遇の好機に恵まれている。まさに現在、飢饉地域で人が食べられ、通りで何千でないとしても何百の屍体が横たわっている今だからこそ、犯罪的抵抗を弾圧するのに躊躇することなく、もっとも苛烈で容赦のないエネルギーでわれわれは教会貴重品の収用を行うことができる（そのため、そうしなければならない）」と、ロシア全土が大飢饉に襲われている現在こそが教会弾圧の絶好機であると断言する。そこでの記述が飢餓民救済について一言隻句も言及せず、間もなく四月に開かれるジェノヴァ会議での国際的立場と経済建設の基金の必要性だけに触れているのは、教会貴重品収用キャンペーンの真の目的を考える際に示唆的である。[13]以下で述べるＡＲＡと同様に、最大の救済能力がある組織へのボリシェヴィキ権力の敵対的対応が、無用な犠牲者の拡大を招いたことに疑問の余地はない。

孤児院の様子：HIA 所蔵

第三節　政府援助活動の現実

ポムゴル中央特別委は県ソユーズ［消費協同組合県連合］を通して成人に八七七、子供に七〇六カロリーの基準で飢饉地域での飢餓民給食活動を行い、食糧人民委員部はそのための穀物六七〇万プード、馬鈴薯五二〇万プード、肉七七万三〇〇〇プードを発送したが、二二年の春にはこの基準の六〇％以下しか充足することができなかった⑭。

飢饉は特に子供に大きな被害を及ぼすとの理由で、子供救済が優先的に行われた。すでに二〇年秋に凶作地域に認定された諸県で孤児院が開かれていたが、国家支援はほとんどなくそこでの食糧事情は二一年に入ると急速に悪化し、カルーガ県から四月に、「孤児院、託児所、養老院、病院、身障者施設は、栄養失調による重篤の病人で溢れている。死亡率が増加している。共同食堂は食糧がないために、存続できない」と、六月にリャザニ県から県内の酷い食糧事情のために、「工業企業の半分以上が閉鎖され、労働者は解雇されている。まず病院が閉鎖され、孤児院から子供たちが個人の手に引き渡された」と報告された⑮。ペンザ県で

は二月一五日以後孤児院での給食は停止された。[16]

この様子は、「孤児院は筆舌に尽くしがたい光景である。飢えた人々が疎開をはじめたときから、孤児院には急速に人が溢れるようになり、定員過剰になった。都市や村の住民が遺棄した子供が収容された孤児院は悲惨な光景で、五〇人しか収容できない孤児院に二〇〇から三〇〇人が溢れ、彼ら全員が醜悪なまでに浮腫んでいるか、骸骨のように痩せ細り、全員が半裸で裸足である。息苦しいほど空気はよどみ、病気に感染した子供の多くが隔離されていない」と描かれ、二一年末でサマラ県プガチョフ郡の孤児院の死亡率は七五%に達した。[17] 一二月に同県コムポムゴルは子供一二万九〇〇〇人、成人四万五〇〇〇人を扶養していただけで、その数はあまりにも少なすぎた。県ソユーズは二二年二月までに二〇万八〇〇〇プードの穀物を調達し、全県で三〇万一七六二人分の共同食堂を開設したが、食糧不足のためにこの数は縮小し、「飢餓住民の需要を充足するにはほど遠かった」。冬の猛吹雪は鉄道と荷橇輸送を大幅に遅らせ、中央からの食糧貨物の配送が同県で終了したのは四月一五日であった。[18]

政府援助の不備は援助物資の絶対的不足に加えて、援助機関のシステムが充分に機能しなかったことにあった。チュヴァシ州ではソヴェト活動家の半数がこの活動に従事していたが、飢餓民に援助物資が円滑に行き渡らなかった理由は次のように指摘された。「二、三種類の食糧を積んだ食糧貨物列車が到着すると、これら食糧は州コムポムゴルによってすべての官庁、人民教育部、社会保障部、保健部、州軍事委、その他に交付され、それぞれの部局は食糧を困窮者の様々なカテゴリーに機械的に交付した」。郡の間でも条件を考慮せず、村ごとに機械的に均等に配分された現行のシステムにその問題がある。五フントのオート麦パンを受取りに六〇キロ離れた鉄道駅に誰も来なかった。[19] 二一年九月にサマラ駅に到着した救援穀物貨物二二輌は宛先不明として中央に送り返され、県執行委議長代理はその即座の返還を要請した。[20]

① Декреты Советской власти. Т.17. С.11-13.　18-19.

② Там же. Т.17. С.115-117; Бюллетень ЦК помгол. 1921. No.1. С.　③ Там же. С.4, 5-6; РГАСПИ. Ф.17, Оп.2, Д.71, Л.1, 8.

④ РГАЭ. Ф.1943, Оп.7, Д.3749, Л.10.

⑤ Итоги борьбы с голодом в 1921-22 гг. С.411; РГАЭ. Ф.1943, Оп. 2, Д.393, Л.3; Оп.6, Д.40, Л.215; Д.449, Л.61, 59.

⑥ Там же. Оп.7, Д.3024, Л.18, 17.

⑦ Итоги борьбы с голодом в 1921-22 гг. С.415; НІА.RU.122-1; На фронте голода. Самара, 1922. С.217; Хенкин Е. М. Очерки истории борьбы Советского государства с голодом (1921-1922). Красноярск, 1988. С.51.

⑧ НІА.RU.18-6.

⑨ Изъятие церковных ценностей в Москве в 1922 году: Сборник документов из фонда Реввоенсовета Республики. М., 2006. С. 135-137; ГАРФ. Ф.1065, Оп.1, Д.16, Л.40-43.

⑩ Бюллетень Самар. губ. Комполитол. 1921. No.1. С.1; No.3/4. С. 29.

⑪ РГАСПИ. Ф.17, Оп.3, Д.242, Л.5; Оп.112, Д.237, Л.2, 4; ГАРФ. Ф.1065, Оп.1, Д.16, Л.36; Следственное дело Патриарха Тихона: Сборник документов по материалам Центрального архива ФСБ РФ. М., 2000. С.341-347; Одинцов М. И. Русские патриархи XX века. М., 1999. С.58-59

⑫ РГАСПИ. Ф.17, Оп.5, Д.48, Л.7-7об.; ГАРФ. Ф.А-353, Оп.5, Д. 254, Л.5-6.

⑬ В. И. Ленин Неизвестные документы: 1891-1922. М., 1999. С. 516-523; Известия ЦК КПСС. 1990. No.4. С.190-193. 飢饉と教会弾圧については、梶川伸一「「赤色テロル」と一九二二年の教会弾圧」（野部公一・崔在東編、前掲書に所収）を参照。

⑭ Хенкин Е. М. Указ. Соч. С.53; Известия ВЦИК. 1922.15 марта.

⑮ РГАСПИ. Ф.17, Оп.65, Д.663, Л.123; ГАРФ. Ф.1235, Оп.96, Д. 508, Л.159.

⑯ Государственный архив Пензенской области. Ф.Р9, Оп.1, Д. 405, Л.145об.

⑰ Известия Губсоюза. 1921. No.20. С.23, 26; Советская Сибирь. 1921. 8 дек.

⑱ ЦА ФСБ. Ф.1, Оп.6, Д.500, Л.72; Книга о голоде. С.26, 28; На фронте голода. С.166.

⑲ Александров В. Н. В борьбе с последствиями неурожая 1921 года в Чувашии. Чебоксары, 1960. С.29-30

⑳ РГАЭ. Ф.1943, Оп.7, Д.1110, Л.186.

第四章　ARAの救援活動

第一節　厳しい活動条件

あらゆる資源が枯渇したソヴェト=ロシアにとって外国からの支援受入れが唯一現実的救済策に思えた。七月一三日づけでマクシム・ゴーリキは、未曾有の旱魃による飢饉への支援を全世界の「すべての善良な人々」に訴え、それは間もな

く新聞で公表された（『ニューヨーク・タイムズ』は七月三一日号に掲載）。このアピールを受けフーヴァーは七月二三日の電報で、アメリカ人捕虜の即時釈放を絶対的条件としてＡＲＡはロシアを援助する用意がある旨を表明し、同ヨーロッパ代表との間で援助をめぐる交渉がリガではじまった。

だが、ボリシェヴィキ指導部は外国の義捐にきわめて懐疑的で、内戦期に白衛軍への食糧援助を行ったＡＲＡへの不信感も根強く、アメリカ側も自らの特権的立場を強硬に主張し、八月一〇日からはじまるＡＲＡ代表と外務人民委員代理リトヴィーノフとの交渉は難航し、ようやく二〇日に援助のためのリガ協定が調印された。これと並行して、八月一五日にジュネーヴ会議でロシア援助に関する首席全権に指名されたナンセンと外務人民委員チチェーリンとの交渉が行われ、同月二七日にリガ協定に準じた協定書が結ばれた。[1]

外国援助機関にその活動で一定の自由を与えたとしても、欧米列強への不信感に溢れた環境の中で八月八日に開かれた中央委総会で、「飢饉諸県の農民に、国外反革命＝帝国主義者たちによって約束された救援の一部はロシア農民の隷属化の条件と絡んでいることを周知させる」ための情宣活動を行うことが承認され、この会議資料は外部秘とされた。この基調は一〇月六日の飢饉援助に関する全ロシア中央執行委決議の中でも、協商国政府は「言葉では飢餓民救済を約束しているが、実際には現実的なあらゆる方策を引き延ばすだけでなく、さらにロシアへの反革命的干渉、ロシア人民の経済的隷属、ロシアへの新たな武力侵攻の準備の新たな試みのために飢饉を利用している」と、繰り返された。このような方針が、外国救援組織に対する基本的対応であった。八月二五日の党中央委は、リガ協定に基づき到来する外国人の監視措置を策定するため、モーロトフ、ウーンシリフト［ヴェー・チェー・カー議長代理］、チチェーリンからなる特別委を設置する旨のレーニンの提案を採択し、ナンセンの救援業務を監視する四人特別委の設置を決定した。ＡＲＡの活動は、一〇月一日づけポムゴル中央特別委幹部会の推挙により、ヴェー・チェー・カーと内務人民委員部の参与であるエイデュークの統制を受けた。[2]

活動直後から大勢のロシア人職員がほとんど根拠なしに逮捕された。一一月四日にサマラで組織責任者が逮捕され収監され、翌日女性監督官が同じように逮捕された。数日後にカザン全権、ＡＲＡ事務所管理官、女性監督官が逮捕され収監された。サラトフ、シムビルスク、ツァーリツィンでも重責にあるロシア人スタッフが当局により収監された。モスクワでも女性通訳官がチェー・カーにより収監された。この伝染病のような逮捕はＡＲＡ組織全体を揺るがせた。エイデュークはロシア人職員の免責特権を認めることを拒否したが、ＡＲＡは食糧配送を一時中断することで応え、ようやく逮捕者は釈放された。[3]

第二節　ＡＲＡの救援活動

九月にペトログラードとモスクワで最初の子供食堂が組織されたのに続き、ＡＲＡによるヴォルガ流域で飢饉の調査がはじまり、一〇月二〇日づけでＡＲＡ代表ハスケルはフーヴァーへの最初の電報で、「飢饉は広がりつつあり、一六〇〇万人が罹災したと評価されている。[人口の] 七五％に達するかもしれない」と書き送り、未曾有の飢饉が「現在は切迫した段階」の時期に、ＡＲＡを中心に外国組織による本格的救援活動がはじまった。[4]

一二月の第九回全ロシア・ソヴェト大会で、「ソヴェト共和国は敵対的資本主義諸国に包囲され、外国からの支援に期待することはできない」と公言されたとしても、ＡＲＡの援助はソヴェト政府のそれを凌駕した。例えば、二二年三月にウファー県で、コムポムゴルは一二万六七七九人を、ＡＲＡは五〇万六一一五人を賄い、飢餓民のそれぞれ九・八％と三九・一％に相当した。[5] 外国援助組織の中でもＡＲＡによる活動は突出し、二二年一〇月から一二月までの外国組織が搬送した貨物総量二二三万一〇一七プードのうちＡＲＡは一七六万六六三五プード（七九・二％）を占めた。国別の救援貨物量も総量二六三二万九〇〇〇プードのうちアメリカ合衆国が圧倒的で七二・九％を占めた（以下ドイツの一二・五、スエーデンの四・七、ラトヴィアの四・六％）。[6] このような最大の援助国アメリカに対してロシアからの不信感と警戒心がもっとも強かっ

穀物配給所（サマラ）：HIA 所蔵

たのは、罹災者にとってきわめて不幸であった。

飢餓援助地区は、カザン（タタール共和国、チュヴァシ州、マリ州を含む）、シムビルスク、サマラ、サラトフ（ドイツ人コミューン、キル共和国のウラリスク県を含む）、ツァーリツィン（カルムィク州、アストラハン県を含む）、ウファー（バシキリア共和国北部を含む）、オレンブルグ（ウラリスク県を除くキル共和国、バシ共和国南部を含む）、モスクワ、ペトログラードの九地区に分けられ、最初の七地区でヴォルガ流域とウラルの全域をカバーした。当初ＡＲＡの活動範囲に、タタール共和国、サマラ、シムビリスク、ツァーリツィン、ウファー、オレンブルグ県とサラトフ県の一部が指定され、九月八日から一一月三日までに救援穀物六三九ヴァゴン

［一ヴァゴンは一〇〇〇プード］が発送された（カザンに一七〇、サマラに一六〇、シムビルスクに一一六、サラトフに一〇八ヴァゴンなど）。[7] サマラでは九月二八日に最初のアメリカ食糧の荷下ろしがはじまり、サマラ市では最初の給食所が一〇月四日に開設され、同日サマラ市近郊で最初の村給食所が四〇〇人の子供給食を開始した。[8] 一二月三日までにサラトフ県デルガチ、ノヴォウゼンスク、ポクロフスク郡で一四六ヶ所の食糧供給所（食堂、子供施設、病院など）が機能し、五万九七二人の子供を扶養した。ドイツ人コミューンでARAはゴロカラムィシ、ロヴノエ、マルクスシタットを任され、八六ヶ所の食糧供給所で合計三万一三四五人の子供を扶養した。[9]

ARA給食所は厳格な規律と統制の下に運営され、「食堂は広く、清潔で、乾燥し、明るい建物に設営されなければならない」など厳しい条件がつけられた。子供の配膳時間はARAにより指定され、そこから日付の入った配給券を受け取り、そこで提供される食事は外に持ち出すことができず、「いかなる場合にも食べきれなかった分を幼児が持ち帰ることは認められない。すべての食事とパンは食堂で食べなければならない」とされた。これは本人以外の受給を防ぐ目的を持っていたが、ウラリスク管区を訪れたARA監督官が「屋外給食所で扶養されている子供は、非常に多くが履物や衣服がないとの理由だけで給食所を訪れることができない」と報告したように、病に罹り衰弱して給食所に行けない子供、特に厳冬に履物や衣服を持たない子供にとってこれは受給の大きな障碍になった。第九回ソヴェト大会でシムビルスク県代表が、履物も衣服もなく共同食堂に行けない七歳以下の大勢の子供がいるこのARA条項を是正すべき欠陥と指摘したように、これはARAの悪名高い規程となった。食事のメニューは、月曜と木曜がココアとパン、火曜と金曜がライス・プディングとパン、水曜と日曜が米入りラプシャー［一種の煮込みうどん］、土曜が大豆、パン、獣脂で、ライス・プディングは砂糖一六グラム、米七〇グラム、牛乳四〇グラム、パン九〇グラムから作られ、一日七七〇カロリーが摂取できた。その後に給食は成人にも拡大され、一二年夏にシムビルスク県で平均して二・五フントの食事で一五七〇カロリーが提供された。「みすぼらしく汚い人々。彼ら全員がボウルや壺、普通のブリキ缶、または食糧を入れる何かを持ってやって来る。

配給を受け取ると彼らの多くは食事を摂るため、すぐに門近くの中庭や雪の上に座り込む。自分の順番を待つ人々の長い行列が給食所や通りにまで辛抱強く立っている」と、そこでの光景が描かれた。[10]

このようにして、二二年六月一五日までにARAは全ロシアで合計子供三一九万五六五四人と成人四六九万三三六五人、総計で子供と成人七八八万九〇一九人を扶養した。カザン地区が子供五六万五二〇六人、成人八三万六〇八八人と最大数で、サマラ地区の子供四三万六九〇八人、成人七八万三〇五六人が続いた。[11]

個々の事例を見ても、ソヴェト政府よりARAを筆頭に外国援助組織を中心に救援活動は展開された。一二月末のサマラ県でARAは飢饉のもっとも深刻なプガチョフ郡を含む西部を、県コムポムゴルの委託を受けた県ソユーズがブグルスラン、ブズルク郡を担当した。燃料不足などが原因でプガチョフ、メンゼリンスク郡で一時中断していた給食活動も二二年二月に入ると徐々に回復しはじめ、給食の受給者は三〇万二四六二人に増加し、月間穀物配給基準も一二月の七・五フントから二月までに二三・七五フントに増量されたが、県ソユーズ宛ての物資はほとんど入荷せず、そこでの給食所のいくつかは完全に活動を中断した。最終的にサマラ県全体でARAは一六四二ヶ所の給食所で二九万八六六一人を扶養した。ブズルク郡でクエーカー教徒団体は子供七万人と成人六万人に食糧支援を与えたが、ブグルスラン郡は被害が軽微との理由で食糧支援を受けなかった。[12]

① РГАСПИ. Ф.17, Оп.84, Д.224, Л.1; H. H. Fisher. Op.cit. p.52; B. M. Patenaude, The Big Show in Bololand: The American Relief Expedition to Soviet Russia in the Famine of 1921. 2002, Stanford U. P. p.38-9; НІА.RU.19-6; Бюллетень ЦК помгол. 1921. No.1. C. 34-36, 39-40.

② Там же. No.2. C.20.

③ H. H. Fisher. Op.cit. p.124.

④ B. M. Patenaude, Op.cit. p.53; The American relief administration in Russia,1921-1923: A case study in interaction between opposing political systems. A dissertation by Benjamin Murry Weissman. 1968. Columbia Univ. p.85; НІА.RU.95-4; 107-5. チェー・カーの厳しい監視と厳冬の耐え難い状況下で、文字通り不眠不休のARA調査官の活動は、Cockfield. H. J. ed, Black Lebeda: The Russian Famine Diary of ARA Kazan District Supervisor J. Rives Childs, 1921-1923. 2006. Mercer UP. に記録されている。

⑤ Усманов Н. В. Деятельность Американской администрации в

Башкирии во время голода 1921-1923 гг. Бирск, 2004. С.54.

⑥ Девятый Всероссийкий съезд советов. С.41; ГАРФ. Ф.1065, Оп. 3, Д.23, Л.4; НІА.RU.10-7.

⑦ Выховдцев С. Помощь иностранцев голодающим детям Поволжья. М., 1922. С. 3-4; Неурожай и Государственная помощь. М., 1922. С.52.

⑧ НІА.RU.106-4; 106-6.

⑨ Бюллетень ЦК помгол. 1921. No.3/4. С.52-53.

⑩ НІА. RU. 129-5; 14-1; 131-3; Девятый Всероссийский съезд советов. С.44; НІА.RU.110-4; Выховдцев С. Указ. Соч. С.5; НІА. RU.12-1; 118-4.

⑪ НІА.RU.12-3.

⑫ ЦА ФСБ. Ф.1, Оп.6, Д.500, Л.72, 73; Д.616, Л.21, 28; На фронте голода. С.163, 166, 169; Голод: 1921-1922: Сб. С.107.

第五章　大飢饉の終了宣言

二二年五月一八日の党中央委政治局会議でＡＲＡの活動を二三年一月一日まで延長することが決定されたが、最終的に二三年八月一日にポスレゴロダ組織の解散に伴い、ナンセン組織を含むすべての外国援助組織は「八月一九日にその活動をたたむ свернуть」ことをソヴェト全権に通告した。[①] 二二年九月の飢饉終息宣言から一年を経て、実質的にすべての飢饉救済活動は停止した。

だが、二二年八月にサマラ県プガチョフとバラコヴォ郡を調査したＡＲＡが「飢饉は決して根絶されていない」と結論づけたように、これはあまりにも早すぎる終息宣言であった。[②] キルギス共和国では二二年の播種面積は二〇年の半分しかなく、サマラ県で二二年の収量は一人当たり九プードを超えなかった。ヴォチャーク州から、二二年の収穫は農村住民一人当たり九プード以下で、「現状から住民は自力で抜け出すことができない」と訴えているように、餓死者をともなう飢饉は依然として各地で認められていた。[③] 一〇月に北西部州［チェレポヴェツ、ペトログラード、プスコフ、ノヴゴロド、オロネツ県、カレリア勤労コミューン］経済会議は、「春に州を襲った災害と昨年よりも著しく低い収穫のため」食糧税の縮小を要請したように、所によっては二二年の収穫は前年よりも低かった。[④]

国内で依然として飢饉が克服されたとの状況は見られなかったが、二三年にはネップの成功が公式に宣言された。四月

に開かれた第一二回党大会でカーメネフは開会の辞で、一年前にレーニンはネップのさらなる後退はないだろうかと問うたこの同じ設問に、「全体としてこの一年間で後退は停止した」ことを明言し、ネップの成果を讃えた。農業生産は回復し、二二年は輸入総量のうち食料品は三四・一％を占めたが、一三年一月でそれは一〇・七％しかない、むしろ豊作による供給過剰のため国内市場で穀物価格の下落が生じていると彼は断じた。[5]

飢饉の終息宣言と農業の復興をことさら強調する背景には、次の事情があった。ゲー・ペー・ウーや軍隊を動員して二二年春から始動した教会貴重品の強制収用は、ロシア国民経済復興の財源として想定されたような財政的成果を挙げなかった。キャンペーン自体に莫大な支出があり、合計約三二〇〇カラットのダイヤモンドが約四万六五〇〇ルーブリと評価されたときに、二二年四月から九月までの教会貴重品収用キャンペーンに七五〇万一〇一八ルーブリが支出され、さらに、党とソヴェト機関の強化にその資金は流用され、このときに機関職員の給与や手当は増大した。[6] こうして、収用された金が溶解されたように、換金された基金も内外で溶解した。

新たな財源探しがはじまった。大飢饉によって、二二年六月にロシア解放委員会［亡命ロシア人の反ボリシェヴィキ組織］が出した評価によれば、ロシアの輸出入バランスはきわめて逼迫していた。二一年には一三年と比較して、輸入は一三兆七四〇〇万ルーブリから二兆四八五五万七〇〇〇に、輸出は一五兆二〇〇〇万から二〇二八万三〇〇〇ルーブリに大幅に減少していた。二一年一月から一一月間の輸入量は八三万六〇〇〇トン［約五万一〇〇〇プード］であったが、すでにヴォルガ流域の飢餓民援助に六月二五日づけ政治局会議で三万五〇〇〇プードの穀物の外国での緊急買付が決定され、徐々に食糧輸入の割合が高まった。一〇月の輸入量のうちそれは三八・七％、救援物資は七・八％を占めた。一三年の輸入量のうち食糧（家畜を含む）が一八・六％しかなかったことを考えれば（最大は金属製品の二五・七％、繊維製品二二・八％と続く）、この輸出入バランスは経済復興にとって不利な材料であった。[7]

このバランスの修復がまず求められた。二二年収穫もまだ不透明な二二年七月六日の党中央委政治局会議で、カーメネ

フにより穀物輸出が提起され、このため穀物買付キャンペーンを当面の最重要任務と認めると決議された。穀物輸出再開のためには飢饉は解消されなければならず、これから間もなく、八月二四日の政治局会議でポムゴル中央特別委の清算に関する問題が提起され、九月七日の同会議でポムゴル中央特別委の清算とそれに替わる飢饉後遺症特別委の設置が決定されたのは偶然ではない。文字通り、飢饉の下に穀物輸出がはじまった。「基本的に飢饉後遺症が根絶された二二年末にようやく穀物の輸出が可能となった」とソ連時代の文献に書かれたように、早すぎる飢饉終息宣言の下で二二年一〇月二五日国防会議政令により、穀物一〇〇〇万プードが初めて輸出された。ネップにおける経済復興のための資金調達はこのように早すぎる飢饉終息宣言によって開始された。[8]

① РГАСПИ. Ф.17, Оп.3, Д.293, Л.6; ГАРФ. Ф.1065, Оп.3, Д.23, Л. 62.

② НІА.RU.107-1.

③ После голода. 1922. No.1. С.73, 84; No.2. С.125.

④ РГАЭ. Ф.1943, Оп.1, Д.11139, Л.14.

⑤ Двенадцатый съезд РКП (б): стенотр. отчет. М., 1968. С.9, 21, 23.

⑥ ГАРФ. Ф.1065, Оп.4, Д.182, Л.95, 92-93; Кривова Н. А. Власть и церковь в 1922-1925 гг. М., 1997. С.88, 121, 122; Бедалин В. И. Указ. соч. С.187. この時まで財政難のために様々な国家施設で人員整理が行われ、賃金は低く抑えられていた。例えば、モスクワ県食糧委は以前の定員六二八人のうち二二年一月には一八四人だけが残った。モスクワ市と郡食糧委の人件費に九万三一五四金ルーブリが必要とされたが、受け取ったのは二万七〇〇〇ルーブリしかなかった（РГАЭ. Ф.1943, Оп.2, Д.397, Л.58）。

⑦ НІА.RU.94-10; РГАСПИ. Ф.17, Оп.3, Д.179, Л.1-2; НІА.RU.18-3; 12-1.

⑧ РГАСПИ. Ф.76, Оп.3, Д.228, Л.1-1об.; Ф.17, Оп.3, Д.302, Л.1; Д. 309, Л.4; Д.311, Л.4; Шишкин В. А. Советское государство и страны Запада в 1917-1923 гг. Л., 1969. С.411.

むすびに替えて

ソ連時代に支配的であった、農民農業経営の復興過程の障碍となったが、「農業生産の分野におけるネップの成果は早くも二一年中に現れた」とする、この大飢饉の評価は完全に誤りであり、ロシア農民史研究者エシコーフが、ネップ導入によって農業生産が速やかに復興したとの権力によって作り出された神話を歴史文献は数十年に亘って広めてきたと指摘

するのは、無条件に正しいように思われる。[1] このような歴史の捏造は当時からはじまり、第九回ソヴェト大会でサラトフ県代表の農学者は、県経済会議の公式統計資料はバラ色に描かれているが、実際には「近い将来の農業崩壊」の兆候が認められると発言した。別の代議員は、レーニンとカリーニンは二一年の秋蒔きで七三％に播種されたと語ったが、スタヴロポリ県では二七％にしか播種されていないと、ネップ導入に伴う楽観的見解に反対を表明した。多くのネップ神話はこのようにしてこの時に生まれた。[2]

ネップ神話の成立、またはこのような歴史の捏造が二一／二二年大飢饉の秘匿と深い関わりを持つのは、「フクシマ」の実例がそうであるように、旱魃という自然災害がその主要な原因であるとしても、被害を拡大し、無用な犠牲者を多数生み出した当局の人為的過誤、または国家的犯罪行為がそれに関わったからにほかならない。秘匿された事実を明らかにすることは歴史家の責務であり、われわれが「災害」の歴史から学ぶことがなければ、犠牲者は安らかに眠れない。

① Поляков Ю. А. Переход к нэпу и Советское крестьянство. С. 296; Есиков С. А. Указ. соч. С.143.

② Девятый Всероссийкий съезд советов. С.112, 125.

【付記】 本稿は二〇一〇―一三年度、科学研究費補助金・基盤研究(C)による研究成果の一部である。

（金沢大学教授）

between Russia and Qing in the 18th century. At the same time, the people of the area experienced a great change in their lifestyle, caused by the introduction of modern agriculture. The settlement policy and collectivization of the agricultural sector from 1929 triggered serious social confusion in Kazakhstan, resulting in the loss of a large number of nomadic populations. Under the "transformation of nature" ideology of the Soviet Union, Kazakhstan was forced to become one of the major crop production areas in the Soviet Union, causing excessive development, which ignored environmental capacity and exerted significant impact on the area. In addition, these development policies were applied in a fashion that ignored and destroyed traditional social systems. Especially, the newly applied production system including the division of labor, together with the migration of skilled peoples from other countries as leaders for collective farms, prevented the accumulation of agricultural knowledge, and also caused the loss of traditional knowledge on nomadic pastoralism and the subsistence complex. Moreover, societal confusion caused by the collapse of the Soviet Union implies that societal flexibility in the area could be a very important factor in the resilience of society to both natural and societal impacts. This is one of the keys to understanding contemporary environmental issues in Central Eurasia.

We can also see a similar societal flexibility or high mobility in "sea nomads" in South East Asian islands. Societal flexibility is thus one of the key concepts for understanding the resilience of a society.

Большевистская власть и голод 1921-1922 гг.

KAJIKAWA Shinichi

Несмотря на то, что голод 1921-22 гг. был одном из самых трагических явлений в России, в советской историографии эта тема была рассмотрена недостаточно и даже в настоящее время исследовается голод 1921-1922 гг. меньше чем его 1932-1933 гг. Кажется, что это положение дел связывается с введением непа, которое в советской историографии в общем считается единственным правильным социалистическим курсом. В настоящее время следующие причины голода 1921-22 гг. обозначенны : неслыханные стихийные

бедствия, в частности засуха, Гражданская война, разрушение крестьянских хозяйств из-за проведения суровой продразверстки, недооценка размера и масштабов надвигающейся трагедии. Но следует добавить что ошибочные ответные мероприятия Советского правительства, несомненно, увеличили жертвы голода. В самом деле нероссийские периферии, как Башикирия, Чувашская область и т.д. наряду с Поволжьем в высшей степени сильно пострадали от засухи 1921 г. и следовательно там трагедия была самой острой. И там значительную помощь голадающим оказали зарубежные браготвольные организации, исключительно АРА, которые были вынуждны работать с недоверием от Советского правительства. В этой статье изложено создавшееся положение вещей голода 1921-1922 гг. при условии введения нэпа.

The Geographical Space of Evacuation: A Record of Field Experience and Practices from the Multiple Disasters of 2011 in Northeastern Japan

by

ODA Takashi

This study discusses the geographical space of evacuation and displacement in northeastern Japan following the multiple disasters caused by the Great East Japan Earthquake (magnitude 9.0) on March 11, 2011 from the viewpoint of the author as a geographer who has personal connections with the affected areas. The author grew up in Iwaki City, Fukushima Prefecture, an area that was affected by multiple predicaments, including the damaging effects of the earthquake, the tsunami, and the accidents of Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant. Some of the author's family members had to evacuate their home temporarily, and they spent time with him and other relatives in Tokyo. Additionally, the author spent many years in Sendai City, Miyagi Prefecture, during his undergraduate and graduate years.

Drawing on such personal experience and previous academic interests in migration, displacement, and education for children in the discipline of